

梶 明彦著「プランディング・ジャパン - 文化観光が日本を救う - 」

成山堂書店 2008年11月28日刊を読む

1. 私はニューヨーク滞在中に大変貴重な経験をした。帰国日程も決まり、仕事一筋で3年を過ごした罪滅ぼしに、家族を連れてナイアガラ、カナダを訪ねた時のことである。私の車のオイルゲージは既にガソリントankが空に近いことを示していた。家族が後ろの座席から早く給油した方が良くと言い募る。しかし、私は高速の出口を一つ、もう一つと欲張り、給油を先延ばしにしていく。ガソリンはやがて底をつき、車は高速道路上でガス欠になり止まってしまった。どうしたら良いか、私は途方に暮れた。非常電話への距離は遠い。しかし、そこまで行って助けを求める以外にはない。そう思った。
- 2.ところが、路肩に止まる我々一家を見て、高速で走っている車が次々と急停車し、どうしたのだと心配気に寄ってくる。私はアメリカ人の親切に驚いた。彼らは、すぐにハイウェイのサービスカーが回ってきて次のガスステーションまでのガソリンをくれるからもう少し待て、と言って我々を慰め、去っていく。中には、次の電話を見つけたらパトロールセンターに電話をしてあげる、と言ってくれる人もいる。私は電話を頼む。全部で9台位の車が止まってくれた。それだけでも私は感激し、アメリカを改めて見直した。
- 3.しかし、最後に止まってくれた車は、自分が次の出口で高速を降り、わざわざポリバケツ一杯のガソリンを買って戻ってきてくれたのだ。私は感激し、感謝し、ガソリンの代金はいくらかと訊ねた。しかし、この名も知らぬ一人のアメリカ人は、日本人である私の想像を遙かに越えて格好良かった。彼は頑なに私が渡そうとする代金を辞退し、言ったのだ。
「お金はいらない。本当に良いんだ。その代わりに、今度あなたが同じようにハイウェイで困っている人を見たら助けてあげてほしい。同じことをしてあげてほしい。」
- 4.ハイウェイ上のこのアメリカ人に、私はアメリカの精神のある種の気高さを感じた。宗教的バックボーン的确かさを感じた。日本にもきっと同じことのできる人はいると思う。しかし、私にできるだろうか。私は自問した。きっと、その人が知っている人ならば、私もガソリンを買って戻ってあげるかもしれない。しかし、ハイウェイ上の見ず知らずの、しかも外国人に対して私は同じことのできるだろうか。これこそが文化の差なのではないだろうか。
- 5.稲作村落共同体においては、同じ村の人同士は助け合って暮らして行かざるを得ない。短い時期に集中する田植えや刈り取りの作業は助け合いの上に成立する。屋根を葺くにも、家を建てるにも、共同体の助け合いは不可欠である。しかし、村を異にする人々はどちらかと言えば

敵に近い。少なくとも助け合いの仲間ではない。こういった社会に育った日本人は結果的に知っている人には親切、知らない人には知らんぷりになるのではないだろうか。知らない人に対しては非社会的であり、ともすれば不親切と言われる日本人なのである。ここから、殻に閉じこもるといふ日本人観も生まれる。

新しい日本人観

6. このように行き詰まった状況にある日本人は、どんな新しいイメージを持ってこのボーダレスの世界で生きていったらいいのだろうか。今まで述べてきたように、私はその中心は日本文化でなければならないと思っている。

勤勉で正直な1億2千万の国民、物事をとことん研究し、工夫し、それによって新しい文化を構築していく国民が、長年かけて築いてきた高度でユニークな文化、これを積極的に、自信を持って世界に向け発信していくのだ。

7. しかも、一部のエリートではなく大衆が文化を創造し、発信していく国、クールで格好良い国、というイメージである。知らない時にはシャイで無愛想であっても、一旦知り合えば、親切で仲良くなりうる国民性、その結果、類い希なホスピタリティーに満ちあふれた友好的な国民。日本人は、その真の姿を的確に示す新しい日本人観を新たな衣として纏い、国際社会において尊敬される存在にならなければならない。経済大国ではなく、文化大国への衣替えである。

[コメント]

社団法人経済同友会や同友クラブでいつも一緒している JALUX 元社長の梶さんの著書。日本のブランド力をどう磨くかを実体験に基づき具体的に提言した観光立国の基本書と考える。地域づくりにも応用できる好著。

- 2009年1月26日林明夫記 -